

⑦古河城

■土井利勝一父は家康一

土井利勝、なぞの多い英傑だ。

養父、利昌が、利勝を預かる時、主君家康から土井氏を名乗るよう命じられたという。

名家出身武将は在地した土地の名を名乗るのが自然だから。

土井氏は美濃守護土岐氏庶流を始めとし、三河碧海土居へきかいに在地し名とした。

これが土井氏の由来となる。

こうして利昌は、早乙女姓だったが、家康の重臣らしい名に変わり、利勝を養子にする。

名字を変えてまで利勝を迎えた利昌だ。すでに嫡男はいたが急遽、長男となり、利勝が嫡男となり、大切に育てられる。

ここから土井利勝にいろいろ逸話が生まれる。

利勝は、正式の家紋の他に、沢瀉おもたかの葉の形をしている替紋を使った。

利勝は、成長すると、養父から「家康様から頂いた短刀だ」と受け取った。

利昌の娘と家康の間につかの間の愛があり、利勝が生まれたと説明を受け、その証だと聞かされる。

利勝は、利昌から事の次第を聞き嬉しくなって信じ、そっと家紋とした。

家康が与えた短刀のかざりから作られた家紋だと、皆が噂するが沈黙を続ける。

この後、利勝は、異例の出世をしていく。

家名・家紋と家康は、利勝が生まれた時から種々の配慮をしており、猛烈な速さの出世と続く、皆が御落胤と噂され納得していく。

1573年春に生まれた利勝は、まず、家康の母、お大の方の兄、水野信元の三男として養子入りする。

水野家の当主で、尾張国知多郡東部から三河国碧海郡西部を支配していた。信長配下の有力国人だ。まず、家康は利勝を身内に預けた。

2年後、信元は武田勝頼に内通したと、信長が追及した。

信長は、謀反だと怒り、窮地に陥った信元は家康の元に逃げる。

信元は、今川義元亡き後、信長と同盟を結びたいと考える家康を信長に取り次いだ。

家康は、その時以来、信元に対して、恩を感じている。

今度は、信元の為に仲介の労を取って欲しいと願ってきた。

そこに、信長は家康に「信元を殺すよう」命じる。

武田信玄亡き後、勝頼が武田家を率いたが、かつての威力は消え、落ち目は誰の目にも明らかだった。

先を見る目に優れた勇猛な将、信元が内通したとは信じられないが、信長が家康の忠誠心を試しているのだと、家康は受けて立ち、叔父、信元を殺す。

信元 (-1576) は、織田信秀 (1510-1551) の勢いに将来性を見て信秀に賭け、今川義元を裏切った。

以後、信秀とは同盟軍として共に戦った。

信元は、信長の代となっても主従関係ではなく同盟を結んでいるだけだと思っていた。

当時の信元力は大きく、今川義元は裏切りに激怒した。

そこで、信元の妹、お大の方を妻にした家康の父、広忠に、忠誠心を問い、離縁させたのだ。

家康から母を奪った信元は、義元が脅威に感じ、信長が頼りにする軍事力を持つ三河の実力者だった。

その後信長は格段に勢力を伸ばし、信元に絶対服従を求める。

独立性を重んじる信元は一方的命令を不満に思い、信長は指示に従わないと不信感が募り、ついに裏切りだと迫ったのだ。

家康も信長と同盟を結び信元と同じ立場だ。

家康も信長との間は主従関係まではいかないと考えていたが、水野家の悲惨な姿を見て、慎重に動かないと同じ運命となると背筋が凍った。

以後、家康は信長に従いながらも、兄弟的同盟者としての存在感も示す、硬軟合わせた対応を心がけるようになる。

家康は母の兄、水野信元を好きではなかった。

信元は家康の親代わりを自称し、あれこれ指図し、気分を悪くしていたのだ。
信長の命令ではあったが、家康の意志で殺した面もあった。
もちろん、信長の命令で、やむなく殺したと、苦渋の表情を崩さなかったが。

信長は水野氏の家督を継ぐのは信元の嫡男ではなく、末の弟、^{ただしげ}忠重(1541-1600)とした。
同時に水野氏の領地を大幅に取り上げた。
行き場を失った多くの一族・家臣が、水野氏の娘、お大の方の呼びかけに応じて家康の元に集まった。

信元の死で一番得をしたのは、家康になる。
当初は、水野家中から憎まれると恐れていた家康だが、信元への家中の信頼は薄かった。
その為、有力国人、水野氏一族・家臣を難なく配下とし、家康は一挙に家臣の層を厚くする。
家康は、母、お大の方と同母弟になる叔父、忠守を匿い、水野氏後継と見なした。
瞬く間に、家康後見人だった水野氏が、家康家臣となった。
水野忠守は、多くの家臣を従え、家康の元に来た。
水野氏嫡流は、^{ただしげ}忠重とされており、水野家は二分され、ますます勢力を弱める。

養父、信元が亡くなり、水野家は混迷した。
家康は、利勝 2 歳を引き取り、改めて、利昌の養子とした。
祖父が父になり、母が姉になる、ややこしい関係となるが、利勝は、兄、元政を差し置き、利昌嫡男となる。
そして、わずか 5 歳で家康に仕える。

家康は、利勝を我が子とは言わなかったが、側近く置き、嬉々として種々の武将としてのたしなみを教え、誰の目にも特別の存在だと分かる。
家康も容姿・性格の全てがよく似て、しかも優秀な利勝を見続けて、内心我が子だとうれしそうにうなずいていた。

1579 年、秀忠が生まれると、6 歳の利勝は子守役に抜擢され、家康と秀忠の元を行き来しながら秀忠の側近くで仕える。

将来の秀忠の側近に繋がる大役であり、譜代の臣ではない利勝の異例の出世に周囲はうなずく。ここからの出世がまたすごい。

父も兄も一族も利勝の出世につれ、地位を上げ、土井氏は譜代の顔を持ち始める。

利勝は家康の心を先読みする知恵があり、家康がはっと感心し、つい頬をゆるめてしまう時がよくあった。

後の天下人、家康を主君として仰ぎ見ながら日常生活にも関わり、家康のすべてを学ぶ。

この当時でも、家臣の子たちにとって、家康は雲の上の人だった。

だが、利勝は物怖じすることなく家康の側で、家康流の人心掌握術・組織作りを身に着ける。

家康の雰囲気・度胸・顔つきなど自然と身につき、家康に似ていく。

ここでもまた、周囲はなるほどとうなづく。

次第に家康の望むとおりに、秀忠の守り役にふさわしい技量を身につけていく。

家康の心を掴んだ利勝は、子と認められなくても、全く平気だった。

秀忠と強く結ばれ、自信を持って、実力で出世の道を歩む。

その道も家康によく似て、分をわきまえて焦らず、慎重で確実だった。

家康に推され、秀忠の全幅の信頼を得た兄のような存在だったが、徳川幕府開府の前後から本領発揮し、押しも押されもしない幕府の重鎮となる。

まずは、幕府の諸制度・人事など重大事項の策定を主導し、幕府の骨格作りに業績を残す。

また、家康・秀忠の秘密裏の計画にも関わり、裏からも、幕府の安定の為に尽くす。

業績に比例して大名としても大きくなっていく。

1602年、下総しもうさ小見川（千葉県香取市）藩1万石の大名となる。

加増あつての後、1610年、下総佐倉（千葉県佐倉市）藩3万2000石を得、老中となる。

その後も加増が続き、秀忠を引き継ぎ、新将軍となった家光により、1633年、下総国古河藩16万石余の藩主となる。

ここで、幕閣の頂点に立ち、まだまだ、幕府を主導し続けた。

1638年、大老となる。これ以後は名誉職となるが、目を光らせる現役だった。

1644年、71歳の死の直前まで古河藩主であることが誇りであり、居城、古河城を愛した。

古河城は、江戸城の支城として江戸城と一体化した城郭として改修拡大した。
自ら、将軍の一部だと信じていた。